

A. 授 業 研 究

飯島 幸久 鈴木 一悠 鈴木 克彦
中村 明彦 山田 孝

Oral Communication を重視した英語 I の指導

—学力差のある高校1年生でいかに Oral Interaction を展開したか—

鈴木 克彦

1 研究の目的

近年英語教育では、英語についての知識の教授や操作能力の養成を強調するのではなく、英語の実際の運用能力の養成に力点が置かれるようになってきた。

英語Iの授業ではどのようにこれを実践したらよいのか。「言語活動」を活発にさせるにしても、学習の発展段階として言語活動を捕らえていたのでは、何か付け加えられたものという感じがいつもつきまとい、言語活動は、学習を補完するものでしかないことになる。

そこで実際の communication を教科書を使った普通の授業で成立させる必要が生じる。Oral Method では Oral Introduction で本文の導入を行い、後に Test Questions で内容の理解度を確かめるという手法が取られるが、次のような問題点がある。

(1) Oral Introduction は教師の一方的な語りで終わってしまい、生徒は受け身的な活動しかない。そのため story 暗唱など教師側の労が多い割に、生徒の反応を引き出す指導ができない。

(2) Test Questions は内容の理解を確かめるというより、記憶力を試すものになりがちである。このため Oral Introduction は生徒の聞く負担を大きくしすぎる。

そこで、教科書の本文の内容を生徒の予習を前提とし、教師と生徒の Q&A を展開しながら、本文の内容のおおまかな流れ、概要を掴ませる Oral Interaction (以後O.I.と記す)による指導を次のような目標を設定し、実際に授業で試みた。

(1) 本文についての教師と生徒間の英問英答を、仮に第三者が教室にいて聞いたと仮定した場合、その第三者が本文の内容をはっきり頭のなかに想像できるよう

に構成する。

(2) 生徒の知識、経験、興味、関心を前以て調査し、その内容を取り上げる問答により、題材をより生徒の身近なものにしていくことで、生徒の積極的な参加を促す。

(3) 生徒が答えるとき、表現形式に煩わせることなく負担を軽くし、自然なやりとりの成立をめざす。

本校は抽選制を主体とした入試が行われており、小規模ながら生徒の学力差が英語学力調査(平成元年度愛知県高校英語研究会編新入生英語学力調査より)の結果、県下で標準偏差が最も大きいことからもしっかりしている。そうした状況下で一斉授業ですべての生徒が満足のゆく結果を求めるのはたいへん難しい。O.I.による英語指導もそれに応じた工夫をしなければならぬ。

そのため生徒の実態に即した指導になるよう授業研究を積み重ね、授業改善を図る。特に学力差が大きい学級集団での指導で、Q&A の展開の仕方、題材と生徒との関連をどのように求めるか、生徒の負担の軽減と自然な英問英答成立度をどうすればあらゆる段階の生徒が積極的に参加できるか、授業記録等を検討して明らかにしていきたい。

2 検証及び調査方法

(1) O.I.の際の英語の質問内容・構成の妥当性を評価するために、指導記録ノート、ビデオカメラ、テープレコーダー等を使い授業記録をとり、授業改善のために授業分析をした。

(2) 生徒の側の変化を調査するために、抽出生徒の発話記録、聞き取りテスト等の分析をした。

3 O.I.による第1次指導実践

——— 各月毎の指導記録より ———

対 象：平成元年度 名大附属高校1年3クラス

期 間：4月～7月

教 材：Senior Swan English Course Book I

(1) 4月

*Oral Interaction の具体例

Lesson 1 Eva. My Friend

Eva is one of my good friends. We were classmates in junior high school and usually walked to school together. Now she goes to a different high school. But we are neighbors and we are going to be friends for a long, long time.

教師・生徒の発話記録とそれに対するコメント

注) A=上位群、B=中位群、C=下位群

Teacher: In April you feel everything is new and fresh. I will also give you new and fresh questions about Eva. Is Eva one of the writer's good friends?

Student B1: (ア)Yes.

T: Right. (イ)She is one of his best friends. Why do they know each other?

S. B1:

T: (ウ)What were they in junior high school?

S. B1: Classmates.

T: (エ)Very good. (オ)They were classmates and what did they usually do together?

S. C1:

T: (カ)Did they have a date?

S. C1: No.

T: Well, what did they do?

S. C1: They walked to school together.

T: Right. Are they in the same senior high school now?

S. A1: No.

T: Right. She goes to a different high school. Does he hope they will be friends for a long time?

S. B2: Yes.

T: (キ)Do you have any friends who are going to be your good friends for a long time?

S. B2: Yes.

T: Who?

(ア)短答で構わない。

(イ)生徒全体に聞かせるために、きちんとした言い方は教師のほうで言う。省略しない方が望ましいが、よく省略してしまった。

(ウ)質問の英語を次々に言い換えて、答を引き出す。

授業前にすぐに答が得られそうもない問いは他の質問文といくつも考えていたが、その場で次々に言い換えていくことができる技量を身に付けたい。

(エ)褒める言葉を忘れずに。

(オ)本文について述べたことが次の質問に繋がっていくのが一番よい。

(カ)本文からかけ離れた内容の質問で答を見付けるきっかけとなることもある。

(キ)教科書の内容を離れて、生徒個人のことについての質問を織り込むとコミュニケーションらしさが出せる。

◇Oral Interaction の主旨説明

4月のまだ緊張感の漲る教室での実践。この段階では生徒に Oral Interaction の方法や意義を最初に説明した。1年間で最も緊張しながらやった時期。

*成績の上下差に対応した質問方法

成績上位者には本文中の英語とは違う表現で尋ねる質問、意見を尋ねる質問などを織り込んだ。

成績下位者には絵を黒板に描きながら、進めていった。ただし、題材によっては絵にならないものも多くあった。質問を易しく言い換えていくテクニックを身につけていく必要がある。

だが、いずれの場合にもコミュニケーションをしているということを念頭に置き、生徒が短答で答えることを許容し、正確さよりもテンポや感情を重視する姿勢は一貫して持ち続けた。英語で答えることに生徒は照れがあるので、その気持ちを解きほぐすためにも教師はほめる英語を何種類か用意しておく必要があった。

(2) 5月

◇「わからん」コールへの対応

1ヵ月ぐらい経つと、生徒の側にも教師側にも一種の疲れが出てきてしまう。

生徒の「わからん。」という声次第に大きくなっていく。「訳を最初から言えば済むことだ。」「テストにでるの?」「俺は英語がしゃべれんでも、訳さえできればいい。」「入試に関係あるの?」など。

教師の側にもこういう声なき声が伝わってくるといついO.I.を省略してしまうこともある。

英語で生徒とやり取りする場面は、Warm Up として個別に数人の生徒を指名し、簡単な英会話をすることとそれに引き続いて O.I.を行うことと Warm Up から O.I.へのつなぎの Classroom English である。後はほとんど日本語で授業は進められる。それでもこうした英語で英語の授業をすることに嫌悪感を抱く生徒の声が大きくなっていく。ここで負けてしまうのである。

筆者も授業の約3分の1から半分だけでさえ英語だけで進めることは、実を言うとなんかしんどいので

ある。ついつい Warm Up から O.I. へというステップを省略して、昔ながらの訳読・文法解説式授業をしてしまうと敗北感を味わってしまう。しかし、生徒の方はそういう時に限って「今日はよくわかる授業だった。」「いつもこれでいいのに。」と言われると自分のしようとしていることは何なのかと考え込んでしまう。

◇定期テストの出題

英検 3 級の過去の問題を定期テストに出題し、生徒の得点により変化を記録した。

採点では質問の意図を的確に答えられている答は若干のミスがあっても、コミュニケーション優先の立場から完全正解と同じ配点とした。但し、文法やスペルの間違いは訂正をし、○ではなく△としてあるので生徒各自がミスを自覚できるように採点した。もちろんこの問題についての採点の仕方や出題意図は予め指導してある。もし、それをしておかないと、生徒は正確な語法と不正確なものが混じりあってしまう危険性がある。

(3) 6月

◇O.I.のできない環境とできない理由

気を取り直して再び始めるが、3クラスのうち1クラスはO. I. を断念。断念したクラスは授業中、英語に限らず他教科でも騒々しい。こういうクラスでは生徒指導が優先してしまい、以後英語で授業を続けることが非常に困難になる。

◇Warm Up English の充実

Warm Up の英語を松本亨の「英語で考える本」の中の「即問即答練習」からヒントを得て下の事例のようなことを始めた。一見普通の英語の questions and answers のようだが、そのねらいは口頭の質問に即座に回答するということである。生徒は話したことばとしての英語によく耳を傾けるようになった。

Teacher : Mr. Yoneda teaches some of you music.

What does Mr. Yoneda teach some of you ?

Student A : Music.

T : I'm interested in rock music. What am I interested in ?

S. B : Rock music.

(4) 7月

Warm Up の英語を楽しくできるとその後の O.I. の展開も楽になる。即問即答以外に教師の経験談や笑話などをしてやったり、英語のなぞなぞを出してやったりした。

通勤の道すがら、何かいいねたはないかとハンドルを握りながら考えるのもなかなかよいものだ。このころになると話す英語を暇なときや他事で手が離せないが頭はフリーなときには想像たくましくするように

なってきた。

4 第1次指導実践の反省及び授業改善

夏休み中に松香洋子氏のフォニックス講習会に参加した。児童へのフォニックス指導をクラッシュ等のナチュラル・アプローチを取り入れながら行っておいだいに参考となった。

その中で松香氏は授業中英語を使い続けて指導することは、一種の battle であると述懐しておられたのが自分の経験からも頷けた。

(1) Warm Up English の重要性

Warm Up の英語のやりとりはその後の O.I. を展開するための点火剤のようなものだ。ここで失敗すると、その後教師も生徒も英語が出にくくなる。

また生徒の興味を引きつるためにはいろいろ目先を変える必要があった。次のようにまとめておく。

ア 挨拶、身近なことを尋ねる英会話を行う。

イ 一文より成る英語を聞かせ、質問し即座に答えさせる練習をさせる。(即問即答)

ウ 教師の経験談を聞かせる。

エ 英語のなぞなぞに答えさせる。

(2) Oral Interaction の教材研究

教材研究でどんな質問をするか考え、質問の英語を紙に書き、それをもって教室に臨んでいた。しかし紙に書かれた英語を読むことで、コミュニケーションのために教師の方が英語を英語らしく話していただくかという反省を持った。

O.I. は紙に書かれた英語の問いを読んでいたのでは台無しになってしまう。かと言って暗記して、それを教室で吐き出すごとく、生徒に質問してもやはりコミュニケーションらしく無くなる。

教室で紙を見ながらやるとしたら、そこには英語の質問が書いてあるのではなく、物語の展開の流れ図で書き、英語は教室で生徒と相対したその場で考える方がコミュニケーションらしさが出る。

しかしその場で英語が出るかという不安もある。そこで、先程の流れ図を見ながら、生徒との対話を具体的に人物を想像しながらやってみる。また、教室では話すだけでなく、黒板に絵や図を描いたり、内容把握のキーワードを板書きしながらやるとやや忙しくなるが、英語は出やすくなる。生徒も集中する。

(3) Teacher Talk による Oral Interaction

Krashen 等の Natural Approach では生徒に話しかける英語を Teacher Talk (コミュニケートしたいという願望から教師による起こる caretaker のような話しことば) で行う。

O.I. もコミュニケーションをねらうならば、生徒が理解可能な英語で行うべきである。

5 O.I. による第 2 次指導実践 (9 月～11月)

O.I. は単に対になる英問英答の連続だけで成り立つものではない。絶えず理解できるインプットを与え続けるようにする気持ちを教師が持ち続けることが大切だ。重要語彙項目を視覚に訴え、生徒の興味を内容語に引き付けるということを 2 学期以降は多用した。

また繰り返して言うことも重要だ。しかし、有り有りとして繰り返すとわかる言い方でなく、ごく自然に話の中に繰り返しを盛り込んでいく工夫もした。

(1) 9 月

Lesson 8 A Letter from London

(The writer of this letter is a German girl. She is studying English in London. This is the first letter to her friend.)

15 September

Dear Frieda

I've been in England three months now. Please don't think I've forgotten you. There has been so many places to see and so many things to do that I've not had much time for writing letters.

So far I've been learning about England and British way of living. I won't tell you about London. There are plenty of good books you can read and plenty of pictures you can look at. I'm sure you'll be more interested to know what I think about life here.

教師・生徒の発話記録とそれに対するコメント

注) A=上位群 B=中位群 C=下位群

下線部は板書きされた key word

T: Now I will give you questions about this letter. Is the person who wrote this letter a girl or a boy?

B1: A girl.

T: Right. In what country was she born?

B2: German.

T: OK. Germany. (ア) Say Germany.

B2: Germany.

T: Good. Where is she now?

B3: England.

T: In what city in England?

C1: London.

T: Good. To whom did she write this letter?

A1:

T: (イ) To her parents, her teacher or one of her friends? (ウ) She wrote this letter to whom?

A1: Her friend.

T: Great. What's her name?

C2: Frieda.

T: Good. Is Frieda in London now?

C3: Yes.

T: (エ) Yes?

C3: No.

T: Which is your answer? Probably not. She is in Germany. Well, then how long has the writer been in England?

B4: Three months.

T: Right. She's been in England for three months. Why did she say, "Please don't think I've forgotten you."

A2: Because.... she didn't write to ...Frieda.

T: A good job. She didn't have much time for writing letters. What is the writer learning in England?

B5:

T: Is she learning about music?

B5:

T: (オ) Open your book to page 54 and read the last sentence.

B5: So far I've been learning about England and British way of living.

T: Good. I'll ask you again. What is she learning in England?

B5: England and British way of living.

T: Yes. She has been learning about England and British way of living. Is the writer going to tell about London?

B5: No.

T: That's right. But why not?

A3:

T: She said, "I won't tell you about London." Why did she say so?

A3: (カ)..... she... books... books and pictures.

T: OK. There are a lot of books to show London.

There are a lot of pictures to show London, too. So she's sure what?

B6: She is sure that you'll be interested to know what I think about life here.

T: (キ) Of course, I'm very interested to know but her friend will be more interested to know what the writer thinks about life in England.

(ア)正しい英語を無理に言わせるのはやらない方針だが、生徒次第。情意フィルターが薄い生徒にはこの程度は許容範囲。

(イ)黙って答えないときが度々あるが、出来るだけ答を引き出すまで、英語の問いをやさしくまた具体的なものに言い換えてやる。

(ウ)疑問詞を後に置いた文で尋ねるのは賛否両論あろうが、生徒から答を引き出しやすいことは確か。

(エ)生徒が答を間違えたときに、本来のO.I.が始まると言ったら、過言だろうか。いかに英語で分からせるか。生徒との対決である。

(オ)注意力散漫でよく聞いていなかった生徒には該当する箇所を音読させ、再度質問する。

(カ)生徒が完全な文で答えようとして、つまづいて言えないときは、やや待ってから言いなおしてやる。

(キ)あまり語法上の誤りをO.I.ではとやかく言うことは邪道かもしれないが、こういう風にもって行けば問題ないのでは。

◇生徒が誤った答を言ったときO.I.が生きる

生徒が誤った答をしたとき、いかにして英語で生徒に分からせるか。教師の力量が問われる大事な場面である。特に予想していなかった答をしてきたとき、生徒の英語のレベルを考慮しながら英語で再度問いかけていき、正しい答が得られたとき満足感を味わう。こういう場面では頭の中で“Teacher Talk!”と念じる。

(2) 10月

◇生徒の指名

反省すべき点だが、この時期、生徒の指名が固定化してしまった。この程度の質問はこの生徒にという固定観念ができてしまった。生徒の英語のレベルを考え質問の内容、語法、語彙などを考慮して指名するが、この質問は生徒の方でも「あっ、これはあいつだな。」ということが分かってしまうらしい。前述したように、小規模校ながら本校は学力格差が非常にあり、止むを得ないことかもしれない。

一方、ほとんど当てられない生徒もいる。下位群に多いのだが、学習意欲を喪失した生徒だ。英語という教科の宿命かもしれないが、学力レベルが一定していた方が授業はやりやすい。

(3) 11月

— Rapid Reading Mohandas Gandhi —

Mohandas Gandhi was brought up strictly, but he was a happy child. He liked to play games like all boys of his age. He was married when he was only thirteen years old. He and his pretty little wife lived in his father's house until they were old enough to have their own house. Child marriages were then the custom in Hindu families all over India.

T: How was Gandhi brought up?

SB1: He was brought up strictly.

T: How about you? Are your parents strict?

SB1: No, not at all.

T: Are you happy?

SB1: Yes, of course.

T: Was Gandhi a happy boy, too?

SB2: Yes.

T: How old was he when he was married?

SB3: He was only thirteen years old.

T: Right. Do you want to get married when you are young.

SB3: No.

内容把握という点から見ると無駄の多い対話かもしれないが、こうした個人の意見や感想を英語で恥ずかしながら言えるようになってきたことは、5月頃に比べる格段の進歩があったと言える。

6 第2次指導実践の反省及び授業の改善と今後の方針

方針

(1) 英語で行う授業

(ア) Comprehensible Input であること

英語を使うことが教師の自己満足に終わらないためには、常に easy English just above the level of competence までの英語で話すことだ。

(イ) Unconscious Assimilation をねらう

継続的にこの種の授業を行っていくと生徒もふと英語で考え英語で答えているときがあると言う。おかしな言い方だが、O.I.の最中、生徒は心の中で教師によって言われた英語を訳している者が大多数であるというのが実態である。しかし、ふとでもよい、生徒が thinking in English を実行ができたという実感を持つことは、今後の英語学習のよい糧となるだろう。

(ウ) gist-getting exercise としてのO.I.

この意味ではやや細部にわたりすぎた嫌いがあった。質問は本文のそれぞれの文についてすべて行っていたが、この点やや形式的になりすぎたと思う。

「流れ図」だけで教室に臨み、要点をさまざまな英語で尋ねるというやり方がよい。

(エ) Model Reading not by the tape-recorder

ずいぶん迷ったが、テープレコーダーを使うのを2学期になってから止めた。テープレコーダーを使うとその分が授業の流れを一時止める。また、生徒の中にはテープレコーダーの操作中の時間を休憩時間ないしは次の学習の準備時間と勘違いする者さえいる。テープは教師が聞き、Model Reading の参考とし、授業のリズムを犠牲にしないようにした。

(オ) Communicative Grammar Practice

来年度はこの面での研究を進めたい。

(2) 英語を使うべきでない場面

文法事項の説明は英語で行うべきではない。生徒は

Oral Communication を重視した英語 I の指導

家庭でも学習することを要求される。人間でなくノートや教科書と向きあったときは、やはり確かな知識が必要となる。

Slow learners や音声英語アレルギーの生徒も教室の中にはいる。そういう生徒には「ここだけは確実に押さえておいてほしい部分」として文法の説明をする。

また、生徒の聞くことができる集中時間も考慮する必要がある。日本語を話し始めたとき、「フーッ！」という安堵のため息がきかれるくらいがちょうどよい。

参考文献

英語指導技術再検討

語学教育研究所編

ナチュラル・アプローチのすすめ

クラッシュン／テレル 藤森 和子訳

The Natural Approach T.D. Terrel

Viewpoints on English as a Second Language

Marina Burt et al.

インプット理論の授業 渡辺 時夫

英語で考える 松本 亨

フォニックス全国講習会資料：Teacher Talk

(ビデオ) 授業の構成と進め方④高等学校の部授業編
ジャパンライム

〈この論文は平成元年度文部省科学研究費補助金（奨励研究(B)）交付を受けたものである。〉